

「一回り違い」は何歳違い？

大 学生の息子が「あいつらはオレらが卒業したあとに入ってきたから、一回り違うんだよ」と友達と話していた。母校で後輩に大学受験について話をすると、中高一貫校なので6歳違いの後輩を指して「一回り違い」と言っていた。

ずいぶん短い一回りだと思い、念のために辞書を引いてみると、「十二支で、同じ年が再びめぐってくるまでの年数。12年。「年が一ちがう」(『大辞林第四版』)とあり、安心した。どこで習ったわけでもないが、12年で一回りというのは“日本人の常識”だと思っていた。

ところが、必ずしもそうとは言えないようだ。2018年にNHK放送文化研究所で「年齢がひと回り違う」は具体的に何歳違うことを指すか調査を行っている。(全国20歳以上1,200人回答)

「だいたい12歳違う」…82%

「だいたい10歳違う」…14%

「12歳違い」が多数派だが、年代差があり、20代をみると34%、つまり3人に1人が「10歳違い」と答えている。

年齢には、30代、40代というように10歳単位のくくりがある。「10年ひと昔」という語もあり、10年で区切りを考えてし

まうのも無理はない。還暦も60歳と切りのいい数字なので、十二支と結びついていない人もいるかもしれない。

また、若い世代は、十二支になじみが薄くなっていることもあるだろう。

実社会では、自分のえとを書類に記入したり、尋ねられたりすることもない。今回、まわりに聞いてみて、自分や子どものえとを知らない人もいて驚いた。えとを一番意識する年賀状も3人に1人は1枚も書かない(2019年、朝日新聞調査)という状況も拍車をかけている気がする。

江戸時代までは生まれ年はもちろん、方角や日時など、十二支(十干)は生活に欠かせないものだった。明治の近代化で、それらは東西南北や数字に替わった。かろうじて、時間では「正午・午前・午後」の「午」、草木も眠る「^{うま}丑三つ時」、日付では「土用の^{うし}丑の日」「酉の^{とり}市」「^{うま}初午」などに痕跡が残っている。最後に残った生まれ年の十二支だが、今後はどうなるだろう。

新しい年を迎えるとき、「えとの引き継ぎ式」のニュースが流れる。今回はねずみから牛へバトンタッチ。「一回り」を守っているのは人間よりむしろ動物たちかもしれない。

東 美奈子(ひがし みなこ)